心の傷

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の傷

【Ｎコード】
Ｎ１３６４Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
オコンネル卿は失恋と裏切りからすっかり心を閉ざし引き篭もるようになった。だが執事はその彼を救おうと。作者が知っている現実のお話を元にしました。

第一章

心の傷

ジョン＝オコンネル卿はすっかり自信をなくしてしまっていた。その理由は簡単で失恋したからだ。しかもその失恋の内容が酷いものだった。

「貴方みたいに太っている人は嫌です」

こう相手に忌々しげに言われたのだ。そうしてそれだけではなかった。

「貴方の様な醜い男が彼女に告白を？」

「とんだ身の程知らずですこと」

相手の女友達から散々嘲笑も受けた。

「貴方の様な者ははいつくばっているのが相応しいというのに」

「貴族であっても」

確かに彼は貴族だ。だがそれでもだというのだ。

「貴方の様に醜い無様な者は」

「恋なぞしてはなりませんは」

「そんな・・・・・・」

そこまで言われて傷つかない筈がなかった。しかも彼は確かに外見はお世辞にもいいとは言えない。太ってもいる。だがその心は人のものだった。傷つきやすい人のものだったのだ。

相手やその女友達にはそれからもことあるごとに言われた。ある時は教会から出る時にだ。その女友達の一人に教会の階段の上から言われた。

「よく教会に来られましたわね、そんな無様な姿で」

「全くですわ」

「醜い者は教会に来るものではありませんわ」

「神の御前には」

周りも言う。そんな有様だった。

道を歩ければわざとその行く先に集まってみせて陰口を言われた。自分の耳に入るようにだ。男友達も皆縁を切り自分を攻撃するようになった。誰もが彼を馬鹿にしせせら笑った。彼は完全に孤立してしまった。

「もういいんだ」

彼は遂に自分の屋敷に閉じこもるようになった。

「僕は誰かを好きになったらいけないんだ」

「あの、旦那様」

「それは」

家の者達はそんな主を慰めようとする。しかしだった。

「いや、いいんだよ」

「いいといいますと」

「どうされますか？」

「もう何処にも出ない」

そうするというのだ。

「誰も愛さないよ。どうせ家には誰も来ないんだし」

「誰もですか」

「確かに。今は」

来客は元々少なかった。彼は人付き合いが苦手で僅かな友人達がいたのだ。だがその彼等も彼の苦境を見捨てて去り今では逆に彼をせせら笑いあることないことをあちこちで言うようになっている。このこともまた彼の心を傷つけていた、

「誰も来られないようになりました」

「では」

「仕事はするよ」

彼は博物学者でもある。その筋では知られた者なのだ。

「それに領地からの収入もあるし。株もある」

「お金の心配はない」

「そういうことですか」

「そうだよ」

まさにその通りだった。彼の家は裕福であり経済的な心配はなかったのだ。それがまた彼を閉じ籠らせる要因となってしまうのだった。
「君達への給与の心配もしなくていいから」
「しかし旦那様はいいのですか？」
「それで」
「いいよ」
閉じ籠ったその声での言葉だった。
「もういいんだ。僕はここから出ないから」
「そうですか。もう」
「これからは」
「僕はここから出るべきじゃない」
その沈んだ声で言うのだった。
「そして誰にも会うべきじゃないんだ。絶対にね」
こうして彼は自分の屋敷に閉じ籠り人目を避けるようになった。ただ博物学者として論文や本を発表するだけだった。他には何もしなかった。一族の者にも会おうとはしなくなった。家にいる使用人達とも出来る限り顔を合わせようとしなくなった。それについてもこんなことを言うようになってしまっていた。
「もう人は嫌だ」
だからだというのだ。
「出来る限り会いたくない。もうね」
「ですが私達は」
「そうです」
使用人達は困り果てた顔で彼等に返すのだった。
「旦那様に何もしません」
「裏切ることも嘲ることもです」
「それはわかっているよ」
今彼は自分の部屋の中に一人でいる。そこから扉越しに話をしているのだ。使用人達は廊下から主の話を聞いて言葉を返しているの

だ。

第二章

「けれど。もう」
「会いたくはないのですか」
「本当に」
「もう傷つきたくないんだ」
彼はまた言った。
「あんな目に遭うのはとても」
「だからですか」
「それで」
「もういいんだ」
彼はこう言うばかりだった。そうして屋敷の中でも一人になっていった。家の者達はその彼を何とか立ち直らせようと思った。彼等にとっては彼は優しく親しみのある主であり憎い筈もない。だからこそだった。
「どうしたものかな」
「そうだよな」
「あのままでは旦那様にとってもよくない」
「そうだな」
「全くだ」
こう口々に言うのだった。
そしてその中の最年長の執事がだ。こう言った。
「ここはだ」
「ここは？」
「何かお考えがありますか？」
「人を呼ぼう」
こう言うのである。
「人をだ」
「ですが今はそれは」

「そうですよ。とても」
「旦那様は」
　他の者達は暗い顔でそれに反論する。屋敷の一室でそれぞれ席に座って話をしているがどの顔も暗いものだった。その顔で話をしているのだ。
「誰とも御会いになられませんし」
「そうも仰っています」
「それでは」
「いや、できる」
　だが執事はここで確かな言葉を出した。
「絶対にできる」
「できると仰いますが」
「というと何ができますか？」
「一体誰を」
「知っている方だが」
　こう話すのだった。
「キャベンディッシュ卿を御呼びしよう」
「えっ、キャベンディッシュといいますと」
「あの方ですか」
「あの方をこの屋敷に御呼びするのですか」
「そうだ、あの方をだ」
　執事の言葉は本気のものだった。それで言うのだ。
「御呼びしよう」
「何故あの方をでしょうか」
「それは一体」
「あの方には謎が多い」
　そのキャベンディッシュという人物はイギリスで最も謎に包まれた人物だと言われている。その生活や素性が一切謎に包まれている。そうした人物であるのだ。
　だが執事はその彼をあえて呼ぶという。皆それが何故なのかどう

してもわからないのだ。
「だが。それでもだ」
「それでもですか」
「御呼びするというのですか」
「若しかしたらだ」
執事はまた言った。
「あの人なら旦那様のお話を聞いてくれるかも知れない」
「その謎に包まれた方がですか」
「それができるというのですね」
「少なくとも悪い方ではないらしい」
謎に包まれているがその評判は決して悪くなかったのである。
「決してな」
「ではあの方を御呼びするのですね」
「この屋敷に」
「そうだ。早速わしが手紙を書く」
執事はすぐにこう言った。
「あの方にあててな」
「すいません、私共は」
「字は」
「いや、いい」
申し訳なさそうな周りに落ち着いて返す。この時代のイギリスでは字を読めない人間もまだ多かったのである。読み書きだけでも結構なものだったのだ。

第三章

「それではな」
「はい、では」
「そういうことで」
こうしてそのキャベンディッシュ卿なる人物に手紙が書かれ暫くして屋敷の前に見事な馬車が停まった。そしてそこから黒いマントにフード、それと仮面を被った男が出て来た。
仮面は銀色で人の顔を模している。だが口はない。目だけであり鼻の形もわりかし平坦だ。その表情のない顔の男が馬車から出て来たのである。
「ようこそ」
「うむ」
彼は出迎えた執事に対して鷹揚に返してきた。
「それでオコンネル侯爵は」
「はい、今日もです」
執事は無念そうに仮面の男に応えた。屋敷の門を開けさせながら述べる。ダークブラウンのその漆黒の扉の中に入りながらだ。。そうして話すのだった。
「残念ですが」
「そうなのか」
「やはり傷が深く」
「わかった」
それを聞いての言葉だった。
「それでは。私と話をさせてもらおう」
「御願いします」
「オコンネル侯爵は立派な博物学者」
屋敷の中を進みながらの言葉だ。屋敷の中は広く見事な左右対称である。赤いビロードの絨毯に立派な階段、それに無数の部屋の扉

が並んでいる。吹き抜けになったその二階と三階の廊下にも扉が並んでいる。彼はその中を案内されてだ。ある部屋の前に案内されたのである。
「こちらです」
「わかった。それでは」
「旦那様」
執事が扉の向こうの主に対して告げた。
「お客様です」
「会わないよ」
こう返事が返ってきた。
「誰にも」
「そういう訳にはいかない」
だがここで仮面の男が言ってきたのである。
「開けてもらおう。執事よ」
「はい」
「これからは私に任せてもらおう」
こう執事に告げた。
「そう頼めるか」
「公爵にですか」
「そうだ。私にだ」
こう言うのである。
「それでいいか」
「わかりました。それでは」
彼はそこまで言うのならだった。こうして執事は去り家の者達も近寄せなかった。公爵は自分で部屋の扉を開けた。そうしてその部屋の中に入ったのだ。
部屋は書斎だった。部屋の壁は全て本棚となっておりそこは本で満たされていた。そしてその中央にはガラスの窓がありその前に黒檀の机がある。そこに一人の太った男がうずくまるようにして座っている。その彼が公爵を見て言ってきたのだ。

「貴方は」
「この仮面でわかるな」
「キャベンディッシュ公爵」
「そうだ、私だ」
こう名乗ってきたのである。
「気になって来たのだ」
あえて偽りを言った。自分をここに呼んだ執事に気を使っての言葉だ。
「それでだ」
「何故私を」
「貴殿は優れた人物だ」
「まさか。私は」
「わかる者にはわかる」
こう言うのだ。既に彼の前に来ている。そして自分から部屋にあった椅子を見つけてこうも問うのだった。
「座っていいか」
「はい」
「わかった。それではだ」
こうして椅子に座ったうえで向かい合ってだ。そうして話に入るのだった。
「貴殿は立派な学者だ」
「学者ですか」
「能力があるのだ」
これが彼への言葉だった。

第四章

「博物学者として。見事だ」
「そう言ってくれるのは有り難いのですが」
だがその褒める言葉にも返答は弱いものだった。
「しかし私は」
「話は聞いている」
「そうですか」
こう言われるとだった。表情が暗くなった。そのうえで俯いた姿はあまりにも暗かった。その暗さにこそ今の彼の全てが如実に出ていた。
「それはもうですか」
「そういうこともある」
公爵はそのことにはこう言うだけだった。
「そしてだ。卿に見せたいものがある」
「見せたいものですか」
「そうだ、あるのだ」
仮面が見ていた。彼のその顔をだ。
「それを見せたくてここに来たのだ」
「それは一体」
「失礼する。少しな」
こうしてその仮面に手を当てた。そして外すとだった。
その顔は見るも無惨なものだった。右半分は普通だ。白く彫のある端整な顔がある。初老であるがそれでも実に整い気品のあるものだった。
しかし問題は左半分だった。無惨に切り刻まれ最早原型を留めてすらいない。目も潰れそこにあるのは深い傷跡だけである。そんな顔だった。
侯爵もその顔を見て絶句する。公爵はその彼にまた話してきた。

「この顔は」
「はい、どうされたのですか？」
「私は変わった体質で」
こう話してきてだった。
「傷が身体に浮かび出るのだ」
「傷がですか」
「そう、身体に受けた傷ではなく心に受けた傷がだ」
「それが出るのですか」
「そういうことだ」
その顔での言葉だ。
「私もまた。今まで多くのことがあった」
「多くのことがですか」
「卿と同じ目にも遭った。それがそのまま出た」
「それでそのお顔に」
「痛かった」
公爵は静かに述べた。
「このうえなくな」
「それ程までですか」
「ただ傷が出るだけではない。痛みも出た」
「痛みも」
「心の痛みがそのまま身体に出る」
そうだというのだ。
「私はな」
「それではかなり苦しまれてきたのですね」
「そして多くの不幸があった」
彼はこうも話した。
「だからこそ。余計に」
「左様ですか」
「そうだ、痛みがわかる」
彼は侯爵に対して言った。

「卿の痛みもだ」
「私の痛みも」
「辛かった筈だ。苦しかった筈だ」
彼に対してまた告げた。
「こうして自分の屋敷から出ずに閉じ篭る程だからな」
「はい、確かに」
侯爵は応えながら項垂れた顔になっていた。それは事実である。応えているその間にもこれまでのことを思い出す。それだけで辛くて仕方なかった。
「今も。それは」
「卿にそうしたのは下らない連中だ」
公爵はここでこう言ってきた。
「所詮はだ」
「下らない、ですか」
「そうだ、下らないのだ」
彼はまた言った。

第五章

「所詮はだ。下らない者達だ」
「それは何故でしょうか」
「卿を傷つけそれを楽しんでいる。人の痛みがわからない」
「人の痛みが」
「そうした連中なぞたかが知れている。下らないと言わずして何だ」
「左様ですか」
「そうだ。そしてだ」
その言葉が続く。侯爵に対する言葉がだ。
「卿は痛みがわかったな」
「はい、よく」
「自分に対してだけでなく他の者も痛みもまた」
「少なくともそれはわかった筈だ。ならば他の者にはしないな」
「それは」
する筈がなかった。彼の受けた傷はそこまで深かったからだ。人は痛みがまりにも深く強いと他の者にそれをすることはなくなるものだ。
「何があっても」
「卿はそれがわかった。だがあの連中はそうではない」
「あくまでなのですね」
「そうだ。卿はあの連中を遥かに越えることができた」
侯爵の心に語り掛けている言葉であった。
「そして本当の意味で優しくもなれるな」
「他人に。誰であっても」
侯爵は確かな言葉で公爵に返した。それは確かだった。どんな者であってもそうしたことをしようとは決して思えなくなっていたのも確かだ。
「私は」

「ならばいい。だが他の者はまだ信じられないか」
「はい、それは」
「だが。信じてみるのだ」
公爵の言葉は温かいものになっていた。その傷だらけの左半分の顔の唇も動く。唇もまた傷だらけだがそれでも動きはしていた。
「せめて家の者達だけでもだ」
「彼等をですか」
「彼等は卿を心から気遣っている」
「私を馬鹿にしているのではないですか？」
侯爵はこう公爵に返した。
「そうではなく」
「それはない」
あくまでないというのだ。
「目を見るのだ。相手の目を」
「目をですか」
「それでわかる。卿を気遣っている者か馬鹿にしているのかはな」
「それでわかるというのですか」
「そうだ。それでわかる」
公爵はこのことも話したのであった。
「目に全てが出るのだから」
「目で」
「私の目はどうだ」
実際に彼自身の目を話に出して来た。
「この私の目は」
「卿の目はですね」
「うむ」
「強いです」
侯爵は彼の目を見ていた。そしてそのうえで答えたのである。
「それもかなり」
「そうか、強いか」

「そして私を見てくれています」
このこともわかった。
「奥深くまで」
「それがわかるのなら充分だ」
それでだというのだ。
「それでだ」
「左様ですか」
「人を見るのだ。その目を」
「目を」
「そう、目をだ」
また話す彼だった。
「わかったな。それではだ」
「はい、それでは」
「目を見て。そのうえでだ」
「わかりました」
「少なくともこの屋敷にはいない筈だ」
公爵はこのことは保障した。
「だからだ。いいな」
「ではこれからは」
「人は痛みから強くなれるものだ。だが私は」
公爵はここでだ。その言葉に自嘲を入れてきた。そうしてそのうえで言ってきたのである。
「この通りだ。仮面を着けることになってしまった」
「仮面を」
「傷を見られるということは辛い」
このことを言うのである。
「それから逃げている。つまらない臆病者だ」
「いえ、それは違うでしょう」
だが侯爵はこう彼に返すのだった。

第六章

「卿は強い方です」
「この私がか」
「そうです、強い方です」
侯爵はまた言った。
「その目でわかります」
「そうか、目でか」
「はい、目でです」
まさにその目でだというのだ。そういうことだった。
「卿に言われた通り目を見ました。それで」
「わかったというのだな」
「そうです。ですから」
また言うのであった。
「わかりました」
「そうか。早速そうしてくれたか」
「はい、そうです」
「では私から言うことはもうない」
公爵の言葉は満足したものになっていた。その言葉で話すのである。
「それではな」
「帰られるのですか」
「傷は受けたが癒せる」
彼はここでこうも言うのだった。
「卿の周りの者達がそうしてくれる」
「人がなのですね」
「少なくともこの屋敷の者達はそうだ」
「ええ、確かに」
「人を信じて。そのうえで外に出ることだ」

これが侯爵に言いたいことだった。
「わかってくれたな」
「よく」
「そうだ。では縁があればまたな」
「御会いしましょう」
こうして公爵は屋敷を後にした。侯爵はその彼を玄関まで見送った。そしてそのうえで自分の執事達に対して言ってきたのである。
「明日は教会に行こう」
「教会にですか」
「外に出られるのですね」
「うん、一緒に行こう」
こう執事達に言うのである。
「それでいいかな」
「はい、喜んで」
「そうさせてもらいます」
執事達はすぐに彼の言葉に応え頭を下げて述べてみせた。
「では明日」
「御一緒に」
「君達がいてくれている」
侯爵の言葉は温かいものだった。
「だから。是非」
「はい、行きましょう」
執事が応える。
「何かあっても私達がいますから」
「御安心下さい」
「うん、そういうことでね」
彼は外に出ることを決意したのだった。そして次の日教会に行くとだった。
かつて彼を嘲り罵った者達はだ。一人もいなかった。彼を振り罵倒したあの女もだ。誰もいなくなってしまっていたのである。

それを教会の牧師にそっと聞くとだ。こう答えてきた。
「皆様それぞれ」
「それぞれ？」
「不幸に遭われまして」
それでいないというのである。
「事故に遭われたり病に倒られまして。悪事が露呈し今は牢の中におられる方も」
「そうだったのか」
「はい、皆様おられなくなりました」
こう侯爵に話すのである。
「誰も」
「そうなのか。誰も」
「因果応報ですね」
執事が侯爵の横でその話を聞きながら述べた。
「まさに」
「因果なのか」
「人を罵り嘲れば必ず報いがあります」
執事は侯爵に対して静かに述べた。
「そういうことです」
「そうなのか。それで」
「はい、それでなのです」
執事は自らの主に話してきた。
「人を傷つければ。必ず報いがあります」
「傷つければ」
「その通りです。それでは」
こう話してそっと侯爵の傍に寄る。他の者もそれに続く。彼の周りは彼を慕う者達で固められたのだった。そのうえでまた言ってきた。
「参りましょう」
「うん、じゃあ」

「神は全てを見ておられます」
牧師がここで言う。
「ではその神の御前で」
「それでは」
侯爵は執事達と共にその神の礼拝堂の前に向かった。ステンドガラスの黄色や青の光を浴びながら十字架の前に跪く。そこにいるキリストは穏やかな顔で彼を見ていた。それは彼のその傷を癒すような。そうした笑みであった。
その笑みを見ながらだ。彼はまた言った。
「また。明日もここで」
「はい、お待ちしております」
牧師が微笑んで応えてきた。
「明日もまた」
「旦那様、その時は私共も」
「御供して宜しいでしょうか」
「是非ね。頼むよ」
侯爵は彼等の心も受け入れた。そしてそのうえで今は神に対して祈るのだった。するとその傷がさらに癒されることを感じられたのだった。

心の傷　　完

２０１０・４・６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1364o/

心の傷

2010年10月8日12時12分発行